

子育て支援の原則は、 子育ての歴史から

汐見 稔幸

長い長い人類の歴史を通じて、子どもはこれまで共通の方式で育てられてきました。

その1つは、子どもに親や家族の仕事を担わせて一人前に仕事をできるようにしてやることでした。そのために、親は子どもを幼いころから家事や農業などの仕事に参加させ、子どもはそこで生きる知恵とスキルを身につけました。もう1つは、子どもたち自身が自分たちで家の近隣の場に異年齢の集団を作り、自在に遊んで育ったということです。家事の場である家の中では、幼い子は危険だし邪魔でした。そこで、「外で遊んでね」と外に出し近隣の遊び集団に委ねるか、「おばあちゃん、おじいちゃん、お願い!」とお年寄りに委ねて育てたのです。遊びは生きることそのものといってよいもので、遊びが豊かであればあるほど、子どもの育ちは豊かになりました。

ところが現代は、この2つの育ちの場が子どもたちの世界から消えてしまったのです。いったい子どもたちはどこでどう育つのでしょうか。核家族の中での子育て・子育てが難しいことは、たくさんの親の悲鳴で実証されています。社会を昔に戻すことはできませんから、今風に工夫し、子どもが育つ社会を創造するしかありません。

その際、今述べた2つのこと、すなわち子どもには「仕事」と「自生的な遊び」がずっと必要だったことがヒントになります。この2つを今風に再現するのです。仕事は、ものを作り、人の役に立つという活動ですから、子どもたちと家庭菜園・地域菜園活動を行う、子ども料理教室を開く、お年寄りの世話活動を組織する…。異年齢で自在に遊ぶ活動は、保育所や幼稚園、こども園*をもっと地域に開放するとともに、お年寄りたちが集い、幼い子どもが世話になることができるような場を地域に無数に創っていく。こうしたことで可能になります。それは便利さの陰で失ってきたものを取り戻すための、ある意味世直しの活動と言えるでしょう。

*就学前の子どもに対する教育及び保育、並びに保護者に対する子育て支援の総合的な提供を図る施設



PROFILE

しおみとしゆき：白梅学園大学学長。東京大学名誉教授。東京大学大学院教授を経て、2007年10月から現職。専門は教育学、教育人間学、育児学、保育学。育児学や保育学を総合的な人間学ととらえ、少しでも学問の光を注ぎたいと願っている。また教育学を出産・育児を含んだ人間形成の学として位置づけたく、その体系化を与えられた課題と考えている。『保育学を拓く』（萌文社、2012）等著書多数。保育雑誌『エデュカレ』責任編集者。